

# 日本人の『甘え』について

中 村 英 勝

近ごろ精神医学者土居健郎氏の『「甘え」の構造』という本が広く読まれている。この本の続編ともいべき『「甘え』雑稿』も刊行されている。さらに、比較社会経済史学の大塚久雄氏と法社会学の川島武宜氏が土居健郎氏と三人で行なった討論が『「甘え」と社会科学』という題の本として出版されている。

先日、お茶の水女子大学の史学科の卒業生が数人で毎月一回行なっている読書会で、最近読んだ本について何か紹介して貰いたいという依頼をうけ、数冊の本をあげたところ、そのうちから『「甘え」の構造』について話してくれということであったので、この本を中心として、前述の『「甘え」と社会科学』、中根千枝氏の『タテ社会の人間関係』などに述べたのち、「これは外国で永年生活した作中の主人公の感慨で

られていることをはじめて、私の家に集まつた数人の人々に話したのであつた。この日本人特有の行動様式ともいるべき『「甘え」』の問題は、幼児教育の問題とも関連があると思われる所以、今回本誌に執筆を依頼された機会に、この問題について若干述べさせて頂きたい。

『「甘え」の構造』の最初の部分で、「甘え」とか「甘える」とかいう語が日本語独特の語彙で、英語にはそれに対応する語がないことが指摘されている。また大仏次郎の『帰郷』のうちから「肉親だからといって余計に甘えたり憎んだりする日本のうちから『「甘え」の構造』について話してくれということであったので、この本を中心として、前述の『「甘え」と社会科学』、中根千枝氏の『タテ社会の人間関係』などに述べたのち、「これは外国で永年生活した作中の主人公の感慨で

あるが、おそらく外国でしばらく生活した者だけが、これを感じとることがができるのではなかろうか」と土居氏は述べている。日本人のうちには、「身内」(血縁者)に対しても「わがまま」のしほうだいをしたり言つたりして、迷惑をかけることを何とも思わないが、「他人」(血縁のない人々)に対しても恐ろしく遠慮がちで丁寧な人々が、相当多くいる。また血縁者でなくとも、同じ組織の中の「身内」や「仲間」の間の「仲間意識」がきわめて強く、「他人」に對しては冷淡な場合が多い。「ウチの会社」・「ウチの学校」などと言つて、ヨソ者と區別する言い方が行なわれる。行業地に行く電車に乗る場合などによく見かける光景であるが、親子兄弟や仲間だけ多くの座席を占拠し、他人に迷惑をかけても平気である。バスの中などで子どもが他の乗客に迷惑をかけても、何とも思わない母親が多い。このような場合、欧米の母親は子どもをきつく叱るという。日本人には「公徳心」とか「パブリック・スピリット」がないと言われるゆえんである。これは、身内にはわがままをいうが、他人には遠慮するというここと正反対のように見えるが、「身内」と「他人」で態度が全く違うという点では共通している。

このようないくつかの特性はどこから來ているのであるうか。土居氏は「甘え」の言語的起源を探求して、「甘え」の語幹であるアマは、日本人ならほとんどすべて最初に口にする乳児語ウマウマと關係があるのでないかと推測する。『大言海』にも、「甘し」は「旨し」に通ずる、とある。「甘え」の心理的原型は母子關係における乳児の心理に存すると云ふことはあまりに明らかである、と土居氏は断定している。中村元氏も、東洋人の思惟方法を比較研究した結果、日本思想の特に顯著な傾向は、閉鎖的な人倫的組織を重視するということである、と指摘している。(『東洋人の思惟方法』3) 「甘え」の感情が幼児期だけに限られず、成人になつても存続し、「身内」や「仲間」の間で狭い閉鎖的な「甘え」の世界を構成している。そして古代人の家族社会で形成された「甘え」の原体験が現代に至るまで保存されたのは、日本が孤立した閉鎖的な島国であつたことと無関係ではないであろう。

大塚久雄氏は前述の討論の中で、マックス・ウェーバーの「理解社会学」の体系における「パトリモニアリズムス」(家産制)および「ピエテート」の概念を「甘え」の概念と関連させて、議論を展開している。川島武宣氏は『日本社会の家族的構成』という著書の中で、「ピエテート」を恭順

と訳しているが、古代ローマ人は「ピエタス」という言葉で、下から上への「恭順」を表わしただけではなく、親の子どもに対する愛情や友人どうしの愛情も「ピエタス」の概念に含めている。ローマのサン・ピエトロ寺院にあるミケランジエロの彫刻「ピエタ」——聖母マリアが死せるキリストの体をひざの上に抱きかかえている彫刻は有名であるが、これは母マリアの子イエスに対する愛情を表現している。

「ハウス・ゲマインシャフト」（家共同態——家族共同体）は「ピエテート」という規範感情ないし倫理的意識、すなわち「恭順」や「愛情」によって支えられているものであり、中心の「家共同態」と従属的な「家共同態」の間に「ピエテート」（恭順）に基づく支配——被支配の関係ができてくる。これが「家父長的支配」であり、これが成長して「家産制支配」（ペトリモニアーレ・ヘルシャフト）となる。日本式に言えば、「本家」の家父長に対しても「分家」が「恭順」の意識をもつということである。大塚氏によると、このようない「ピエテート」の概念に甘えの概念を補つて考えると、本家と分家の間の支配——被支配の関係、保護と従属の関係もよりよく理解されるというのである。

西洋ではこのような「ピエテート」の感情は非情な権力に

より、また諸民族の激しい移動や戦争により抑圧されてしまった。ところが島国日本ではそれほど激しい戦争や移動もなく、「甘え」の行動様式が親子以外の社会関係にも拡大された。親でない他人に対して甘えの関係が形成されたのが「親分＝子分の関係」で、こうして「日本社会の家族的構成」が成立したのであると川島氏はいう。

ここで思い起こされるのは、イギリスの文明史家トインビーが述べていることである。彼は人類社会と自然環境の間の、また諸文明の間の「挑戦」と「反応」の関係を重視する。「乾燥」という自然環境の挑戦に対する反応として、西南アジアや北アフリカに人類最初の文明が発生したと説いている。彼はまた、シリアのような諸文明が激しくぶつかり合った「文明のロータリー（円形交差路）」で、ユダヤ教やキリスト教のような「高度宗教」が生まれたと説いている。エジプト・バビロニアなどの強大な諸勢力にはさまれた弱小民族であるユダヤ人によって、きびしい倫理的な人格神である、宇宙の創造者・主宰者である唯一神ヤーヴェの観念が形成された。これに対して日本では八百万の神々があり、神々は人間とあまり変りなく、江戸中期にすでに新井白石が言ったように「神は人なり」である。すぐれた人が死ねば神として神

社に祭られ、普通の人でも死ねば、仏教における戒名のようない、「……のみこと」という名を与える。このような日本では、天地万物の造物主であり主宰者である唯一神という観念はなかなか理解され難い。

中国では、天子は天命（宇宙の主宰者である天帝の命）を受けて天下を統治するものであるから、不徳の天子が現われれば追放され、別の有徳者が天命を受けて新しい王朝を開くという「易姓革命」（天命が革まつて王道が易わる）といふ思想が形成されたが、日本では、天照大神の子孫が、天地とともにきわまりなく、「万世一系」の天皇として統治するという「天壤無窮」の思想が形成された。こうして日本では長

い間「世襲の原理」・「血統崇拜」の思想が尊重されてきた。

以上見てきたように、西南アジアのような諸民族・諸文明が激しくぶつかり合ったところでは、きびしい倫理的な唯一神をもつ「高度宗教」が発達した。また中国民族のよう周囲の「夷狄」と激しく対立し、しばしば彼らによつて征服された経験をもつ民族の間では、「王道思想」や「易姓革命」の思想が形成された。これに対し、周囲を「海」という自然の濠で守られた日本では、きびしい「高度宗教」が成立せず、「血統の原理」や「世襲主義」が温存された。これは、日本人の社会で「甘え」の感情や行動様式が現代に至るまで

武家政治を「霸道」として排斥したのであつた。国学者は儒教を排斥して復古神道に基づく尊皇論を展開したが、この儒学と国学の二つの系統の「尊皇論」は、幕末の日本人に大きな影響を与え、明治時代に天皇制国家が成立してから昭和のはじめに至るまでの日本の教育を支配した。このような「皇国史觀」は第二次世界大戦の敗戦によつてようやく崩壊したのであつた。

— 7 —

温存されたことと無関係ではないであろう。

私は「甘え」を全面的に否定しようとは思わない。母親の乳児や幼児に対する本能的で無条件かつ絶対的な「愛」ほど尊いものはない。人類はこれがあるからこそ、これまで存続してきたということもできよう。人類のみならず他の動物の場合にも、母親の愛情とこれに対する子どもの「甘え」が見られるが、これは「種の保存」のための天の配剤であるとみなすこともできよう。しかし幼児期から少年期・青年期と「人格」が形成されるに従って、「甘え」から「卒業」しなければならないことも確かである。日本の青少年はこの時期に激しい受験戦争にまき込まれ、家族の「過保護」のもとに置かれるため、「甘え」という「受身的愛情希求」から脱却し切れないのだとも言われる。過保護のもとに受験戦争にうち勝つてエリート・コースに乗つても、或る日ふと空しさを感じて、また他の場合には受験戦争に敗れ挫折感にさいなまれて、自殺をはかるということにもなりかねない。

「自分がある」とか「自分がない」とかいう言い方も日本語独特のもので、外国语にはないものであるという。「自分がない」ということはどういうことであろうか。日本の歴史に

はルネサンスも宗教改革もなかつたため、きびしい責任倫理に裏付けられた個人主義——個人の人格の価値という理念が確立されなかつたと言われる。これは江戸時代に日本民族が長い間「鎖国」の状態にあつたことと無関係ではないであろう。しかし現代世界において、国土が狭く資源乏しく人口だけが多い日本が国際社会に孤立して生きてゆくことはできない。敗戦後日本は独立しても、日米安保条約によつて軍事的に保護され、自衛隊はあつても国防費は国民総生産の一パーセント以下ですんできた。このような条件のもとに日本経済は高度成長をとげ、日本は自由世界第二の「経済大国」となつた。今日の日本はもはや国際的な「甘え」を許されない状態となつた。日本民族全体として、また日本人ひとりひとりとして、「甘え」から脱却することが重要な課題となつていゐる。これは幼児期に始まる日本の教育の今日的な課題といふのではなかろうか。

(お茶の水女子大学)

